

第11回8020童話賞

児童生徒の部「童話大賞」作品

「重雄おじいちゃんの歯」

中学 2年生

暑い夏の日の重雄おじいちゃんの話。

夏が来た。夏といたら夏休み。

夏休み、孫たちが帰ってくると昨日電話で話したな。

お盆の三日間にはぎやかになりそうだな。

何を買ってしようかな。

確か、アイスが好きだったな。

買っとかないと。

重雄おじいちゃんの奥さんは、去年亡くなり一人暮らし。一人はやはり寂しいので、孫が来る日を楽しみにしていました。

そして、お盆の日。

「おじいちゃん。」

かわいい声が聞こえてくる。

すっかり大きくなってている。

やはり、子供はいいもんだ。

孫と話しをするのは楽しいな。

アイスを食べたら畑へ連れて行こう。

アイスを食べたら畑へ連れて行こう。

ん。

アイスは、バニラに限る。あ、おいしそうだ。溶けてきた。さあ、食べよう。

痛い。歯がすごい痛い。

虫歯かな。いや、そんなはずはない。

私は、七十年間虫歯なしだった。

だけど最近歯を磨いていないんだよな。

痛い顔はしてられない。

孫がいるんだからな。

話しをして忘れよう。

話をしながらアイスを再び食べはじめたお

じいちゃん。

「食べ終わったなら畑へ行こうね。トマトやキウリ、ナス沢山あるよ。」

「やったー。あれ、おじいちゃんの前歯欠けてるよ。」

見られてしまった。

この前、せんべいを食べていたら欠けてしまったんだ。

やはり、見つかってしまった。

「大丈夫だよ。いつか歯医者行くよ。」

嘘をついてしまった。

私は、歯医者が大の苦手なのだ。

あのキーンという歯を削る音がものすごく嫌なのだ。

「おじいちゃん、息臭よ。歯磨いてないでしょ。」

我ながら感心する。

私の孫は、観察力がある。

その通りで何にも言えない。

「お義父さん。歯医者行ってますか。」

孫の母、私の息子の妻が聞いてくる。

やはり、本当のことを言わなきゃいけないのか。

「三十年前に行ったきり行ってない。」

「行かないと全部の歯がなくなりますよ。」

「おじいちゃん。畑行かないで歯医者行こうよ。」

行くことだけは、どうしても嫌だ。

余計な事を言うな。

「予約取ってないから無理だよ。」

「やっぱり、歯医者行かなくちゃ。今なら、スマホで簡単に取れます。私が、取りますね。」

勝手にかばんからスマホを取り出し、予約をとりはじめた。

もう止めることはできない。

ああ。空気がありませんように。

「今日の午後が空いているそうです。予約入れときました。」

もう行くしかない。

泣いているところを孫たちに見せるわけにも

行かない。

「じゃあ、皆で一緒に行こう。来てくれる。」

「もちろん。」

孫がなぜか喜んでいる。

私も嬉しい。

歯医者に行ったおじいちゃん。

先生に、沢山怒られたが3時間かけて治してもらった。

そして、あっという間にお盆の三日間が過ぎお別れするとき。

「今年は、いつもより楽しい夏休みだったよ。

気をつけて帰りなね。」

「うん。おじいちゃんかっこいいね。」

「じゃあね。」

別れ際の言葉は、おじいちゃんをとても幸せにしてくれました。

そういえば、と、おじいちゃんは歯医者に行った後の自身の変化に気付きました。

歯を磨くようになり、息も臭くなくなり、よく噛むようになり痩せ、笑う回数も増え、心がスッキリするようになりました。

この話は、私のおじいちゃんの話でした。